子育てサークルに対する母親の態度

―パーソナリティ要因を考慮して―

小林　　真・米納　絵吏[1)]

Attitude to Child-raring Groups in Mothers with Young Children : Concidering their Personalty Factors.

Makoto KOBAYASHI and Eri KOMENO

要約

本研究では、子育てサークルに参加した経験のある母親を対象に、参加する前に抱いていた期待と参加後の感想を比較した。今回の対象者を全体としてみると、期待に比べて感想の方が低下していた。特に中途で参加をやめてしまった母親にその傾向が顕著であった。しかし母親のパーソナリティを詳細に検討したところ、内向性が低い母親のうち２つのグループは、態度の変化が生じていなかった。また、内向性が低く協調性が高い母親は態度の変化が見られた。したがって子育てサークルでは、参加する母親のパーソナリティに配慮した運営が求められる。

キーワード：子育てサークル、母親、幼児、パーソナリティ要因
Key words ： Child-raring groups, Mothers, Young Children, Personality Factors

問題と目的

原田（2007）は、子育てと地域の人間関係に関して、1980年に大阪で行った調査と2008年に兵庫で行った同じ内容の調査を比較した。「あなたは自分の子どもが生まれるまでに、ほかの小さい子どもさんを抱いたり、遊ばせたりした経験はありましたか」という質問に対して、1980年の調査では「よくあった」と答えた人が42.3%であったのに対して、2008年の調査では32.8%であった。また、同じ質問に対して「なかった」と答えた人は、1980年では15.0%であったが2008年では26.9%であった。すなわち、自分が親になる前に乳幼児と接触する経験は約30年の間に大きく減少したといえる。したがって、親になるためのレディネスが十分形成されずに親になった者が増加しており、育児に対して不安感やストレス感を抱くことが多くなったと考えられる。

ストレス感を緩和するためには、ソーシャルサポートが有効である。かつては、子育て中の母親は、近隣の知人や親戚などによるサポートを受けることが一般的であった。しかし内閣府（2007）によれば、生活面で協力し合える近隣の人がいないと回答した者は65.7%に上り、地域におけるサポートが存在しないと感じる人が大多数である。したがって、多くの親は、近隣によるサポートが欠如している中で子育てをしていると考えられる。このような問題を解決する施策として、子育てサークルの有効性が検討されている。

子育てサークルとは、幼稚園・保育所にまだ通っていないいわゆる“未就園児”を連れて、親子で遊びに行けるグループのことである。横川・小田（2012）は、子育てサークルに継続して通ったことで、育児不安が低減したことを報告している。また、母親自身が仲間を求めて参加した場合には、サークルへの参加によって育児に対する負担感が軽減されることも明らかになった。

しかし、子育てサークルに参加することで、かえってストレスを感じるなどの問題も想定される。中村（2008）は、幼稚園に子どもが在籍する母親を対象とした面接調査から、母親同士の関わりがマイナスの効果を生むケースを報告している。たとえば自分の子ど

1）高岡市立牧野みどり保育園

もを他の子どもと比較して不安になったり焦ったりするケースや、親同士の付き合いに疲れてしまうケースである。したがって、母親が子育てサークルに何を求めているのかを把握したり、母親自身のパーソナリティ要因が、子育てサークルへの態度にどのような影響を及ぼしているのかを検討する必要がある。

ところで、水野（2004）は大学生を対象とした調査で、主要５因子性格検査の外向性と協調性が社会的スキルの形成に寄与し、それが人間関係の満足度に影響を及ぼしていることを明らかにした。また水野（2004）によれば、情緒の不安定さが友人関係の満足度に負の影響を及ぼしていることも示した。これらの結果を成人である母親の人間関係に援用するなら、パーソナリティ要因として情緒不安定性・外向性・協調性の３つの側面を取り上げることが有効であろう。

以上の議論を踏まえて本研究では、幼児を育てている母親を対象に調査を行い、育児サークルに対する態度を、サークルに参加する前に抱いた期待と参加した後に抱いた感想という２つの観点から測定し、これらを比較する。その際に、主要５因子性格検査の３つの因子を測定し、母親のパーソナリティ要因が態度の変化にどのように寄与しているのかを検討する。

方　法

対象者　Ａ市内の幼児の母親301名（393部配布し、回収率は76.6%）。内訳は、子どもが保育所に在籍している母親が164名、子どもが幼稚園に在籍している母親が92名、保育所・幼稚園のどちらにも在籍しておらず育児サークルを利用している母親が45名である。

手続き　質問紙調査を実施した。Ａ市内の１つの幼稚園と２つの保育所に子どもが在籍している母親に対しては、担任保育者を通じて調査用紙を配布・回収した。育児サークルを利用している母親には、３つのサークルにおいて活動の終了時に調査を依頼し、個別に配布・回収した。

調査内容　①フェイス項目、②育児サークルに参加する前に抱いていた期待、③参加後の感想、④パーソナリティの４つの内容を尋ねた。以下にそれぞれの調査項目の詳細を記載する。

①フェイス項目

・子育てサークルへの参加の有無、参加していた期間

・母親の年齢、子どもの年齢、家族構成

②育児サークルに参加する前に抱いていた期待（以下、期待尺度と略記）

期待尺度の調査項目は、佐藤（2003）、橋元（2010）を参考に、大学教員１名と学部学生５名の協議によって９項目からなる尺度を作成した。

③育児サークルに参加後の感想（以下、感想尺度と略記）

この尺度は期待尺度と対になっており、期待尺度の９項目の文章表記を改変して作成した。たとえば、期待尺度の最初の項目では「子育てサークルは自分の子どもとの関係が深まる場所になる。」と尋ね、感想尺度の最初では「子育てサークルは自分の子どもとの関係が深まる場所になった。」と尋ねた。

④パーソナリティ

主要５因子性格検査の尺度構成に関する研究（村上・村上,1997）から、情緒不安定性・内向性・協調性の３つの因子のそれぞれに高い負荷量を示した項目を、負荷量の高い順に５項目ずつを選択した。

①のフェイス項目は、選択肢または数値を記入してもらい、②～④の尺度は全て「よくあてはまる」を５点、「全くあてはまらない」を１点とする５件法で回答を求めた。

調査時期　2011年11月。

倫理的配慮　以下の２点を調査用紙の表紙に明示し、子育てサークルの参加者に調査を依頼する際には口頭でも説明した。①調査は無記名で行い個人を特定しないこと、②回答するかどうかは本人の自由意志であり回答しないことによる不利益は生じないこと、の２点である。

結　果

１．子育てサークルへの参加経験

子育てサークルへの参加経験は、「なし・数回で止めた・継続して参加した」の選択肢から１つを選んでもらった。参加経験がない回答者は101名、参加したが数回で止めた者（以下、中途群と表記）が42名、継続して参加した者（以下、継続群と表記）が152名、無記入が６名であった。調査用紙を回収した場（幼稚園・保育所・子育てサークル）ごとに集計した結果をTable 1に示す。なお以後の分析では、育児サークルに参加した経験のある194名を対象にする。

Table 1　育児サークルへの参加経験

	なし	中途	継続	計
幼稚園	15	10	66	43
保育所	86	30	45	161
サークル	0	2	41	91
計	101	40	111	295

（注）参加経験が無記入　６名

２．パーソナリティの因子構造

パーソナリティ尺度の因子構造を確認するため、15項目に対して因子分析を実施した。この尺度は主要５因子性格検査の中の３つの特性に基づいて作成されているため、３因子解を指定して最尤法による抽出を行い、varimax回転を実施した。因子負荷量が0.4に満たなかった１項目を削除して再度因子分析を行ったところ、３因子構造が確認された。適合度は χ^2（52）=88.08（p<.01）で、３因子による累積寄与率は58.36%であった。因子分析の結果をTable ２に示す。主要５因子性格検査の因子名に基づき、第１因子を情緒不安定性、第２因子を内向性、第３因子を協調性と命名した。

３．子育てサークルに対する態度の変化

子育てサークルに対する期待がどのような潜在構造からなっているのかを検討するため、９項目に対する因子分析を行った。最尤法で因子抽出を行ったところ１因子構造となり、固有値は3.92、寄与率は43.53%であった。因子分析の結果をTable ３に示す。１因子構造であったため、以下の分析では９項目の合計点を算出して、これを期待尺度得点とする。同様に、感想尺度９項目の合計得点を感想尺度得点とみなす。

期待尺度と感想尺度の得点の変化をFigure １に示す。子育てサークルへの参加前後で意識がどのように

Table2　パーソナリティ項目の因子分析結果

番号	内　　容	F1	F2	F3	共通性
性格７	くよくよ考え込んでしまう	.866	.208	.058	.796
性格10	あれこれ悩んだり、思いわずらったりしてしまう	.847	.225	−.003	.768
性格13	どうでもいいことを気に病んでしまう	.829	.218	.062	.738
性格８	心配性だ	.761	.134	.043	.599
性格15	いつも何か気がかりだ	.658	.135	−.048	.454
性格５	おとなしい性格である	.160	.906	.048	.849
性格１	にぎやかな性格である	−.042	−.715	.239	.571
性格12	引っ込み思案である	.363	.710	.032	.638
性格３	地味で目立たない性格だ	.283	.667	−.160	.551
性格14	無口である	.173	.619	−.071	.419
性格４	思いやりがある	−.092	.090	.803	.662
性格２	誰にでも親切にする	−.067	−.107	.761	.595
性格６	人助けのためなら、厄介なことでもやる	.048	−.066	.505	.262
性格11	人情があつい	.190	−.201	.440	.270
因子寄与		3.49	2.91	1.78	―
寄与率（累積寄与率）		24.91	20.77	12.68	(58.36)

Table3　期待尺度の因子分析結果

番号	内　　容	F1	共通性
期待９	子育ての悩みを共有できる	.782	.612
期待７	母親同士で話すことができる	.763	.582
期待４	子育ての情報を得ることができる	.737	.542
期待６	子育てサークルに来ることで気分転換ができる	.736	.542
期待３	自分に友達（ママ友）ができる	.713	.509
期待８	子育てサークルの支援員（保育士など）と話すことができる	.671	.450
期待５	家庭では出来ない活動ができる	.512	.262
期待２	子どもに友達ができる	.483	.233
期待１	子育てサークルは自分の子どもとの関係が深まる場所になる	.430	.185
因子寄与		3.92	―
寄与率		43.53	―

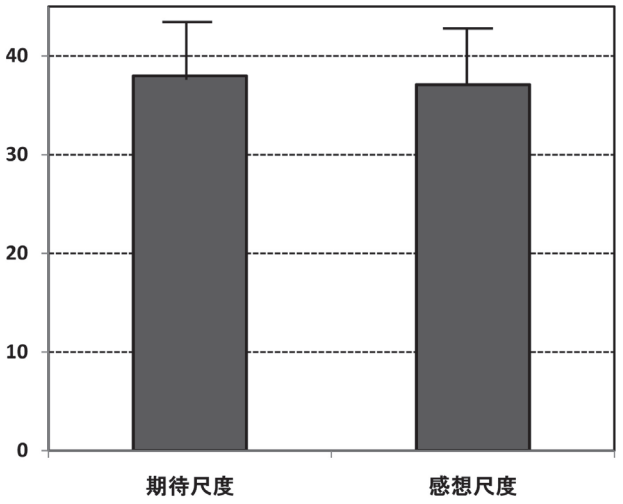

Figure 1 サークルへの態度の変化

変化したかを検討するため、期待尺度と感想尺度の間で対応のある t 検定を実施した。その結果 t（179）=5.25となり、２つの尺度得点の間には0.1％水準の有意差が得られた。すなわち、子育てサークルに参加した後には、参加前に抱いていた期待が満たされていないことが明らかとなった。

また、継続して参加していた母親よりも途中でやめてしまった母親の方が感想尺度の得点が低くなるのではないかと思われたため､参加経験（中途群・継続群）に分けて期待尺度と感想尺度を比較した（Figure 2）。参加経験を被験者間要因とし、期待尺度と感想尺度を被験者内要因とする混合要因の分散分析を行った結果、期待尺度・感想尺度の間の得点差はΛ=.753、F（1,177）=57.84（p<.001）で有意になった。これは先の t 検定の結果と一致している。また、参加経験との交互作用はΛ=.868、F（1,177）=27.02（p<.001）

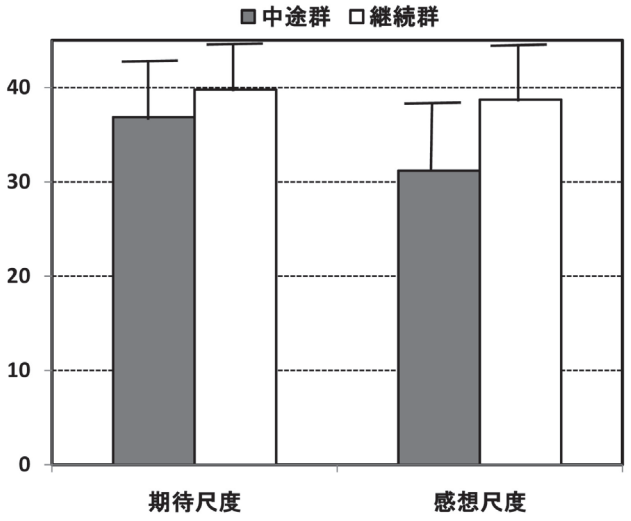

Figure 2　参加経験別に見た態度の変化

で有意となった。

交互作用が有意になったため、単純主効果検定をおこなった。まず参加経験ごとに期待尺度・感想尺度の間の差を検討した。中途群ではF（1,37）=23.83（p<.001）となり、感想尺度の方が得点が低くなっていた。継続群では､F（1,140）=9.93（p<.01）となり、感想尺度の方が得点が低くなっていた。次に期待尺度・感想尺度のそれぞれについて中途群と継続群の得点を比較した。期待尺度についてはF（1,189）=9.94（p<.01）となり、中途群の方が低かった。感想尺度についてはF（1,180）=47.98（p<.001）となり、やはり中途群の方が低かった。

これらの単純主効果検定の結果から、中途群は継続群に比べてもともと子育てサークルに対する期待が低く、参加後の感想は継続群よりも大きく低下していたことがわかる。そこで、中途群と継続群の間で母親のパーソナリティに違いがあるかどうかを検討するため、参加経験を独立変数とし、パーソナリティの３つの因子得点を従属変数とする多変量分散分析を実施した。その結果、Λ=.985、F（3,184）=.933となり、有意な多変量主効果は得られなかった。したがって、中途群と継続群の間にパーソナリティの違いはないと考えられる。

４．パーソナリティのタイプ別に見た態度の変化

中途群と継続群の間にはパーソナリティの違いは見られなかったが、子育てサークルの参加者には様々なパーソナリティの母親が存在すると考えられる。そこで以下では、パーソナリティをいくつかのタイプに分類した上で､期待尺度と感想尺度の間の差を検討する。

（1）パーソナリティの分類　パーソナリティのタイプを分類するために、３つの因子得点を利用したクラスター分析を行った。距離行列には平方ユークリッド距離を用い、クラスターの結合は最長距離法を使用した。デンドログラムを見ながら４クラスター～８クラスターに分類することが可能だと考え、５通りのクラスター分析を実施した。その結果、７クラスターに分類した際に最も解釈が容易であったので、７クラスター解を採用した。各クラスターの人数はそれぞれ、CL1：78人、CL2：25人、Cl3：35人、CL4：16人、CL5：24人、CL6：３人、CL7：12人となった。第６クラスターは３人しか該当者がいなかったため分析から除外し、以下では６つのクラスター間でパーソナリティのタイプと参加尺度・期待尺度の差を検討する。

各クラスターのパーソナリティの特徴を検討するため、クラスター間でパーソナリティの３つの因子

得点を比較した。各クラスターの因子得点の平均値をFigure 3に示す。３つの因子得点を従属変数とする多変量分散分析を実施した結果、Λ=.072、F（15,502.82）=53.22（p<.001）で有意な多変量主効果が得られた。個別変量に関しては、情緒不安定性でF（5,184）=46.27、内向性でF（5,184）=40.08、協調性でF（5,184）=71.63となり、いずれも0.1%水準で有意な主効果が得られた。TukeyのWSD法でクラスター間の多重比較を行ったところ、情緒不安定性に関してはCL2・CL4＜CL5・CL1＜CL3＜CL7の順で得点が高くなっていた。内向性に関しては、CL5・CL7・CL2＜CL1・CL3＜CL4の順に、また協調性に関しては、CL7・CL1＜CL2＜CL4＜CL3・CL5の順に得点が高くなっていた。これらの結果から、各クラスターのパーソナリティの特徴は以下のように解釈できる。

CL1：内向性がやや高い・協調性は低い
CL2：情緒的にとても安定・内向的でない・協調性はやや低い
CL3：やや情緒不安定・やや内向的・協調性が高い
CL4：情緒的に安定・とても内向的・やや協調的
CL5：全く内向的でない・協調性が高い
CL7：情緒不安定・内向的でない・協調性が低い

（2）パーソナリティのタイプごとの期待尺度・感想尺度の差　６つのクラスター間で期待尺度と感想尺度の間に差が見られるかを検討した。各クラスターの期待尺度と感想尺度の平均値をFigure 4に示す。クラスターを被験者間要因、期待尺度と感想尺度を被験者内要因とする分散分析を実施した結果、期待尺度・感想尺度の間の差はΛ=.891、F（1,164）=20.11（p<.001）で有意となった。クラスターとの交互作用はΛ=.940、F（5,164）=2.10（.05<p<.10）で有意傾向となった。

交互作用は有意傾向であったが、Figure 4からわかるように期待尺度と感想尺度の差にはクラスターによるに違いが推定される。そこでクラスターごとに期待尺度・感想尺度の差を対応のあるｔ検定によって検討した。その結果、CL1ではｔ（69）=2.71（p<.01）、CL2ではｔ（22）=1.16（ns.）、CL3ではｔ（33）=3.08（p<.01）、CL4ではｔ（13）=2.72（p<.05）、CL5ではｔ（23）=2.16（p<.05）、CL7ではｔ（9）=-.200（ns.）となった。これまでの分析から、全体としては期待尺度に比べて感想尺度の得点が低下する傾向にあるが、CL2とCL7の２つのグループでは期待得点と間総得点の間に有意差が存在せず、期待と感想が一致していた。

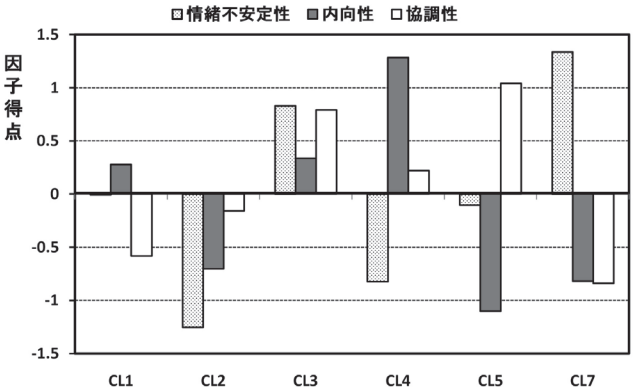

Figure 3　各クラスターのパーソナリティの特徴

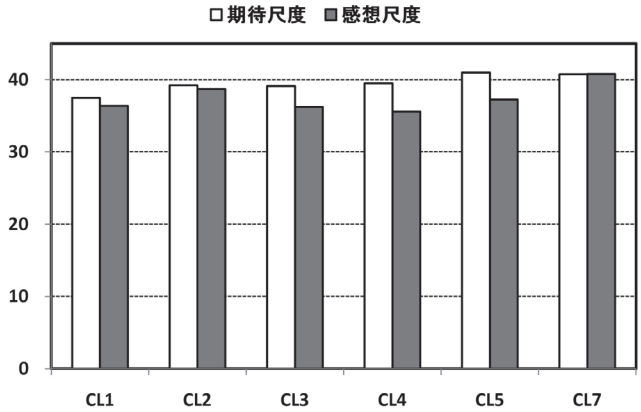

Figure 4　各クラスターの態度の変化

考　察

１．子育てサークルへの参加後の感想について

本研究では、子育てサークルに対する期待尺度と感想尺度を比較して、サークルへの参加が母親にとって満足のいくものかどうかを検討した。２つの尺度を比較した結果、参加する前に抱いていた期待に比べて参加後の感想の得点が低下していた。特にそれは中途群で顕著に見られた。したがって、本研究を実施したＡ市内の子育てサークルは、利用者のニーズに十分に応えられていないという現状が明らかになった。期待尺度が１因子構造であったことから、子育てサークルの利用者は複合したニーズを同時に抱いていることがわかる。したがって、様々なニーズのいずれもがある程度満たされるような活動が求められている。

小林（2005）が指摘するように、グループワークを通じて母親同士がコミュニケーションをとる機会が十分に保証されている子育てサークルでは、参加者の満足度は高いと考えられる。小林（2005）の実践では、保育を専攻する学生が子育てサークルの活動を企画し、親子のふれあいを促進したり、親子同士が一緒に遊ぶ場を設けている。さらに母親だけが集まってグ

ループワークを行ったり、専門家に気軽に相談できる場が設定されている。スタッフや会場の確保といった問題はあるが、多様なニーズに応えられるような子育てサークルを展開することは可能であると考えられる。

2．母親のパーソナリティによる感想尺度の違い

母親のパーソナリティを７つのクラスターに分類し、期待尺度と感想尺度を比較した結果、CL2とCL7の２つのグループのみ感想の得点が低下していなかった。そこで、この２つのクラスターに共通する特性を検討する。Figure 3と分散分析・下位検定の結果から、この２つのクラスターはいずれも内向性が低いという共通点が見られる。情緒不安定性に関してはCL2が低くCL7は高い。また協調性に関しては、CL2が平均レベルでCL7は低い。したがって、この２つのクラスターの共通点は内向的でないという点だけである。したがって、内向的でない（外向的な）母親は、子育てサークルへの態度が低下しないと考えられる。逆に、内向的な母親には、参加者同士の間形成を構築できるような活動が有効であろう。

なおCL5は、内向性が低いにもかかわらず感想尺度が低下している。CL5は協調性が高く、他者のために自分を生かしたいと考える母親である。したがって、サークル内でリーダー的な役割を与えるなど、他者のために活躍できる場を与えることで態度の変化を防げるのではないだろうか。

このように、母親のパーソナリティによって子育てサークルへの態度の変化に違いが生じている。サークルの主催者や支援者には、母親のパーソナリティを考慮したきめ細かいサークルの運営が求められる。

引用文献

橋元美香（2010）子育てサークルにおける母親の育児意識・態度の変化　平成22年度富山大学人間発達科学部特別研究論文

原田正文（2007）子育ての変貌と次世代育成支援　名古屋大学出版会

小林真（2005）子育てサークルにおけるグループワーク　日本臨床発達心理士会第１回全国大会論文集, 128-129

水野邦夫（2004）良好な対人関係に及ぼす性格特性・社会的スキルの効果について－自己評定データをもとに－　聖泉論叢, **12**, 17-27

村上宣寛・村上千恵子（1997）主要５因子性格検査の尺度構成　性格心理学研究, **6**, 29-39

内閣府（2007）平成19年版国民生活白書

中村真弓（2008）育児不安と母親の仲間関係－母親の仲間関係のサポート効果を中心に－　尚絅学園研究紀要　Ａ．人文・社会科学編, **2**, 1-12

佐藤京子（2003）子育てサークルへの参加による子育て意識の変化　南九州看護研究誌, **1**（1）: 47-56

横川和章・小田和子 2012 子育てサークルへの参加による子育て意識の変化　兵庫教育大学紀要, **40**, 19-27

付　記

本研究は、第二著者（米納）が富山大学人間発達科学部に提出した特別研究のデータを、第一著者（小林）の責任で再分析したものである。

本研究における統計処理は全てSPSS10 for Windowsを用いて実施された。